
世界の終わりの海辺にて

tei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の終わりの海辺にて

【コード】

N06880

【作者名】

te i

【あらすじ】

夢の終わりは世界の終わり。

少年と少女の物語。 他サイトにも投稿しています。

君が君であるために唯一の何かが欲しい？

それは実に不可解な要求だ、何故なら君はこの世界自身であり、君自体が一つの、唯一にして全なるものなのだからね。

これが夢だと思うかい。

眼が覚めれば消えてしまうような、そういう夢だと、君は思うのかい。

それでも君は君自身だ。君は唯一にして全、神と同義の存在なんだ。世界のすべては、君なんだ。

分かるかい。

世界は、君でできているんだよ。

世界は、君でできているんだ。

「アイデンティティの崩壊の危機」

彼女は、そつと呟いた。

「え？ なに？」

僕は、聞き返す。

「アイデンティティの崩壊の危機」

「それを言うなら、拡散の危機じゃないのか」

「そつとも言う」

少女。

彼女は、そう呼んでも一向差し支えないような年齢だ。少なくとも、僕にとっては。

「それが、どうかしたのかい」

僕が聞いても、彼女は言葉を返してはくれなかった。ただじつと、僕らの座る海辺から見える範囲の全てを、その眼に収めていた。

「少女はただ海辺に佇む、か」

「訂正が必要だよ。少女と少年、その他大勢の人々はただ、海辺に佇む、でしょう」

少女は僕の言葉尻を捕らえて、そう言った。にこりもしない、少女。

陽光に、彼女の決して長いとは言いつれない黒髪がなびいた。潮風が海の匂いを、遠く離れた街のどこか腐りきったような匂いのする場所へ、律儀に運んでいく。かもめはその後を滑空してついでいく。波が、風と入れ違いに、僕らの足元へ貝殻を置いていく。

「世界は、何でできているんだろう」

彼女は、今度ははつきりと呟いた。

「さあ、……原始と分子と、その他色々な構成要素でできているんじゃないのかな」

僕は潮風のように律儀に答える。しかし、少女からの返答は無い。

「それとも君はそう思わないの？」

僕は聞いてみる。やはり、返答はなかった。

「自分が本当に自分であるという証拠は、どこにあるのかな」

彼女は、またそう呟いた。

「さあ、ね。そんなこと、知ってる人、いるのかな」

「じゃあ、君は如何思う？」

「僕かい」

僕は不意に、心の中のどこかにある海が渦を巻いて、地中深く吸い込まれていくような気がした。その渦の中で、僕と少女はもがいていた。その足掻きは何の進展ももたらさないし、何の停滞ももたらさない。ただ、吸い込まれていく。

僕は地中で、声を出さずに泣いている。少女の姿が見つからなくて、泣いているのだ。

「どうしたの？」

少女が、気遣わしそくに僕の顔を覗き込んでいる。一瞬の白昼夢から抜け出して、僕は微笑んだ。

「どうもしないよ」

世界の終わりの海辺。

そこに佇む、僕と彼女と、その他大勢の人々。皆、何を求めているのだろう。

「僕は、僕が僕自身であると、知っている。だから、それを疑わなようにしているだけだよ」

「いつ、君はそのことを知ったの？」

「生まれたときに」

誕生は消滅の始まり。

人は海から生まれ、海に還るんだ。大地に埋められても、流れ流れて海へ行き着く。それを分かっているから、人は海を畏れ、敬い、慕う。

だから、海辺はいつでも、世界の終わり。

「僕は、生まれたときから、此処を知っていたよ」

「私も、きつと、知っていたんだと思う」

少女は微かに肯いた。

「私は、きつと、私自身なんだろうね」

世界が終わる、その瞬間が近づく。海辺は決して変わらずに、僕らの身体を待っている。僕らは目まぐるしく自身のあり方を変更しながら、海に還る時を待っている。決して交わらない生と死が、初めて、そして最後に交じり合うその場所へ、還る時を待っている。

「私も、他の人も、勿論君だって、世界が終わる時を知らないんだ」

「そうだね」

「ここが世界の終わりだって事は分かっているのにね」

「そうだね」

世界は、いつか終わる。

でも、どこからが終わりかで、どこからが始まりなんだろう。海から全てが始まって、海で全てが終わるのなら。

意識の混濁のよう。

今は夢なのか。現実なのか。

「夢の終わりは、一つの世界の消滅だよね」

少女はそう言った。立ち上がる気配はない。

「ねえ」

そして、立ち上がった僕を、眩しそうに見上げた。

「この世界は、誰かの夢なのかな」

僕は、自分の中に、その問いに対する答えが用意されていないことに気づく。地中深くに佇む僕は、少女の歌声を聞いている。

海のように深遠で、海のように鮮やかで。海のように真っ青で、海のように厳しい、そういう歌声を頼りに、彼女を探している僕。他に誰もいないんだ。僕と、少女の他には、誰も。

「この世界は、きつともうすぐ終わるよ」

僕は、ようやくそれだけ言った。

「この世界を夢見ている誰かが、そろそろ眼を覚ますんだ」

少女は、僕の言葉に、微かな身じろぎで反応を示した。

海辺は静かだ。僕と、少女と、その他大勢の人々が、ただ、ただただ、ただただ、ただただ水面を、じっと見つめている。世界中の人々が、ただただ静かに、その時を待っている。

「ねえ」

少女は立ち上がって、僕に問う。

「この夢は、一体誰のもの？」

僕は彼女に微笑んで、そっとその手を握る。

「ここに集まった、すべての人のものさ」

少女は無言で、まばたきをした。そして、ふっと微笑んだ。地中深くで、僕は彼女を抱き寄せる。

そうして、一つの世界が、消滅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0688o/>

世界の終わりの海辺にて

2011年7月2日03時24分発行